

教育課程実践モデル事業 EAST通信 第28号 (H31.1.4) 松江東高等学校

教科	授業者	実施学年	科目
国語	棕 和香 教諭	1年	国語総合
公民	井上忠洋 教諭	1年	現代社会
数学	古藤昭弘 教諭	1年	数学Ⅰ
理科	福田秀孝 教諭	1年	物理基礎
体育	佐藤 剛 教諭	2年	体育
英語	足立樹洸 講師	2年	コミュニケーション英語Ⅱ
	杉尾裕邦 教諭	1年	コミュニケーション英語Ⅱ

教育課程実践モデル事業の平成30年度第3回運営指導委員会に合わせた公開授業が12月14日(金)にありました。外部から約60名の方に来校いただく中、4限～6限にかけて7名の先生が公開授業を実施しました。授業研究のあとには、教員研修会も行いました。

【授業者への運営指導委員からの指導・助言】



↑国語の授業風景

↓公民の授業風景



公開授業では、7名の先生が知識構成型ジグソー法、グループワーク、討議(ディスカッション)など様々なAL型の授業を実施しました。AL(アクティブ・ラーニング)は教員が講義形式で一方向的に教えるのではなく、生徒たちが主体的に仲間と協議しながら課題を解決するような指導・学習方法ですが、授業後、運営指導委員のみなさまから次のようなことをご助言いただきました。

- ・クラス全体に向けて生徒が発表する展開の場合、発表の内容について生徒同士でやりとりさせる活動を意識的に多くすると効果的である。
- ・授業における問いの設定やワークシートの課題設定が生徒のレベルに合っているか検証しておく必要がある。
- ・ジグソー法など、議論をさせる授業では、どの程度生徒が議論するか教員が想定しておくことや題材が議論に適しているかどうか授業のねらいにそって考えることなどが議論をデザインすることにつながる。
- ・まずは教員が楽しむ事が大事である。
- ・体育はチームで作戦会議をするなど興味深い活動であったが、筆記用具を持ってこさせて気づきをその場で書かせるともっと効果的であると考えます。
- ・授業中に生徒が作成したものの評価はできるだけその授業中にしてしまうなど、フィードバックを早くすることが意欲の面でも大事となる。
- ・教員の教科に関する知識・技能の力をより一層高めることで授業の構想や展開に深みがついてくると思われる。
- ・AL型授業でしっかり学力をつけることが重要である。

【運営指導委員会での助言・指導より】

「AL型授業でしっかり学力をつけていくことが重要である」など、様々なご意見をいただきました。

★高旗浩志運営指導委員より

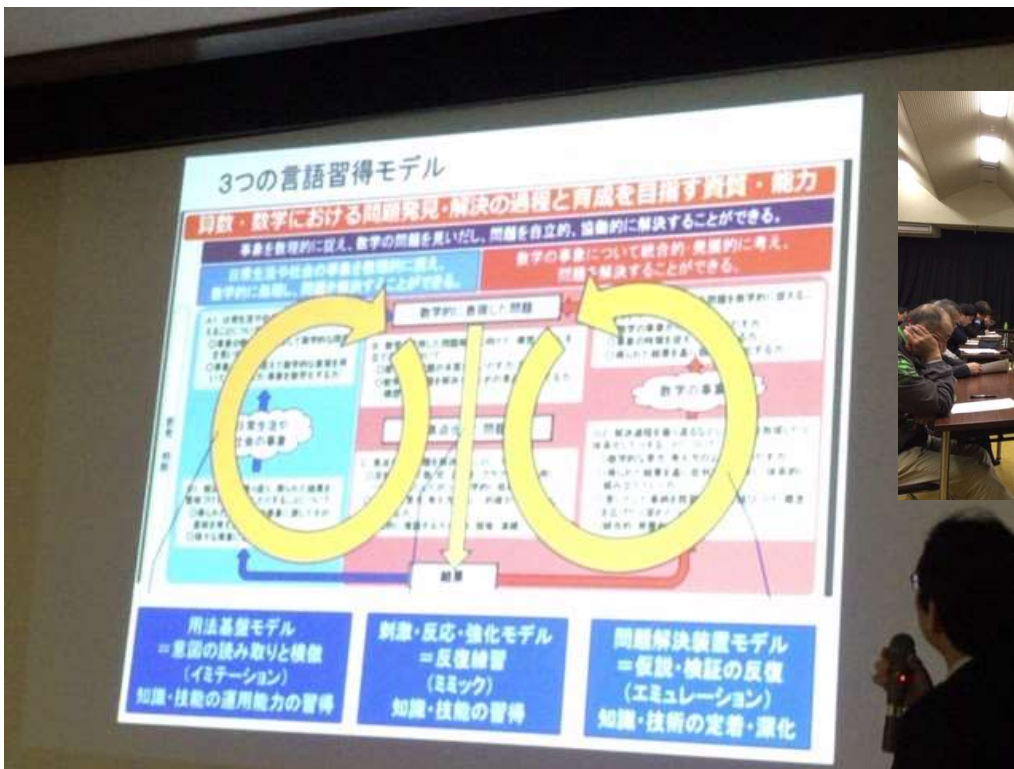
- ・丁寧な取組をされたと思う。全員がAL型授業に挑戦されたことは評価できる。
- ・授業評価アンケートを変えられたことは良かった。これは、個々の教員の評価である。だからこそ、「数値の上がり下がりがどうして起きたのか」など、主体的に時間をじっくりかけて教員が解釈していくことが重要である。そこから自身の授業の強み弱みを見極めて授業改善につなげていくべきである。そのためにも授業評価アンケートのより詳細な個票を作成していくことが重要となる。

★猫田英伸運営指導委員より

- ・授業評価アンケートは、クロス評価をするべきである。
- ・先生方の研修はもっと必要である。しかし、方法論だけまねると形骸化する恐れがある。

★御園真央運営指導委員より

- ・授業評価アンケートと中間試験や期末試験の結果などの全体の相関をとると見えてくるものがあるかもしれない。
- ・授業評価アンケートの結果について、教員によるばらつきがあると考えられるが、「めあてや目標がしっかり明示されているか」「ペア学習が効果的か」などの要因によるものかなど質問項目からしっかり分析していくことが必要である。同じ教員でも、クラスによってペア学習が効果的かどうかは教員個人でも分析できる。
- ・教育課程実践モデル事業自体は終了するが、同じ内容のことを次年度以降も継続していくべきである。



←猫田英伸運営指導委員の教員研修会での説明スライド
3つの言語習得モデル
①ミミック
②エミュレーション
③イミテーション

【教員研修会での指導・助言より】

- ・授業改善をすることではじめて課題が見えてくる。全ての先生が取り組むことからスタートする。
- ・「EAST 通信」は、事業終了後も継続すべきである。松江東高校が授業改善の先進校となることにもつながる。
- ・「まねる」には3つの方法がある。
 - ①ミミック：反復練習。
 - ②エミュレーション：ゴールに向けた活動、仮説と検証の繰り返しで完成。
 - ③イミテーション：ゴールもプロセスも提示する。まねるから学ぶへ。ミラーニューロンを参照。このうち授業でめざすのはエミュレーションである。
- ・松江東高校だからできる授業改善の方法を確立させていく
- ・進学校ほど学力差に悩むものである。小中学校では記憶力頼みで成績が良かった子も、高校では悩みがちとなる。課題に対しての画一的な答えが作りにくく意欲を失ってしまうケースも考えられる。努力することよりも結果で評価されることに慣れてしまっているため、勉強のためのスキルが重視され努力しなくなるケースもある。だからこそ教師の課題設定が重要となるし、教師が生徒の努力の過程を認めていくことが大事となる。
- ・戦後まもなくの講話型授業から穴埋め型授業になり、今はAL型授業へと変わりつつある。自らが学習するスタイルではあるが7割は習得である。そのあとに活用→探究となる。そこでは高め合う学習集団が必要となる。
- ・これからは自分に合う学びを子どもが自ら見つけていくことが大切となる。コップが変わらなければ水はあふれる。コップを大きくすることが大事であり、それは活用→探究の中で大きくなっていく。

～教員研修会を終えて～

「授業改善による質の向上と働き方改革という、ともすれば相反することが求められる中で、すべての先生が今年度AL型の授業をされて協働性を育まれたことが大きな成果ではないか」と運営指導委員のみなさまから言っていたことは、次年度以降の大いなる意欲向上につながった。

【コラム】 「ミラーニューロンとは・・・」

パソコンの文字ではなく、自筆の文字でプリントを作ること、ミラーニューロンが刺激されると言う。ミラーニューロンとは、他人の考えていることがわかったり、他人と同じ気持ちにさせたりする脳内細胞のことである。ヘテロジニアス(異質なものを意識し提示することで、教育の本質である「まねぶ(まねる)＝学ぶ」ができるようになるらしい。まねることの重要性は、アーミッシュの研究でも指摘されている。こうした学習科学がこれからは重要となる。学習科学は、認知心理学や脳科学の知見を基礎にしつつ、効率的な学習のあり方などを研究する学問である一方で、学習者の主体的な取り組みを重視するものである。学習科学を意識することがこれまで以上に教育現場で求められている。